

原 著

## 自閉症支援現任者の学びと実践に関する認識 —インタビュー調査からの考察—

小田桐早苗\*<sup>1</sup> 大田 晋\*<sup>1</sup>

### 要 約

現在、自閉症者への支援としてTEACCHプログラムにおける構造化のアイデアが評価されており、我が国においても取り組む支援者が増加している。しかし、途中でその実践を断念してしまうものの存在が指摘されていた。そこで、本研究では構造化のアイデアを取り入れた支援に継続的に取り組んでいる支援者を対象に、その継続の要因を検討するためインタビュー調査を実施した。

インタビュー調査の結果、専門家からの指導の機会と自閉症者支援の指針に立ち返る学びの場の重要性が示唆された。

### 1. はじめに

自閉症者への包括的支援プログラムとして、世界的に認められているものにTEACCHプログラムがある<sup>1)</sup>。TEACCHプログラムは、米国ノースカロライナ大学で開発され、ノースカロライナ州全体の自閉症者支援プログラムとして発展してきたものであり、「自閉症の人々の生活（学習、余暇活動、就労）ができるだけ自立して活動できるように支援しながら、一般の人たちと共生・共働していくことを目指すものである」とされる<sup>1)</sup>。さらに、「TEACCHスタッフが考える自閉症とは、人間のコミュニケーションをはじめ、認知的、社会的、そして行動上の機能に重大な混乱や影響を及ぼす複合的な障害である。この重症性と複合性に対応するための療育は、その複合性や重症性に勝るほどに包括的なプログラムでなければならず、単次元からの単純な治療や教育的アプローチでは不十分であると強調する」とし<sup>1)</sup>、自閉症者の個別性に配慮し、人生全般にわたる支援を実現している。我が国においては、上記TEACCHプログラムに関する書籍が出版され<sup>1-5)</sup>、自閉症者への支援実践に活かされている<sup>6)</sup>。

また、我が国では、自閉症への支援に関する実践報告なども増えており、自閉症者の行動障害への

支援について報告したものや<sup>7)</sup>、教育機関における問題行動への対応を報告したものが<sup>8)</sup>ある。これらは、自閉症者の特性に配慮した支援により改善を図ろうとするものであり、その重要性を指摘している。また、森本<sup>9)</sup>は軽度知的障害者における支援困難事例の特性分析を行い、支援者による自閉症の障害特性の理解と特性に配慮した支援の必要性を述べている。しかし、自閉症支援において、その理解や配慮の重要性について指摘されているものの支援者に焦点を当てた文献は少ない<sup>10)</sup>。

筆者らは、上記のような現状を踏まえ、自閉症者への支援プログラムとしてTEACCHプログラムが我が国の支援現場でどのように認識されているのかを把握し、今後の支援者養成に資するため、平成21年度厚生労働省障害保健福祉推進事業助成を受け、A県内における知的障害者支援事業所におけるアンケート調査を実施した<sup>11)</sup>。左記調査より、TEACCHプログラムの認知度については低くないものの、①TEACCHプログラムのアイデアを取り入れてみようとしたが途中で断念した事業所の存在や、②自閉症者への特性に配慮した「構造化のアイデア」のみを見ようみまねで取り入れてみたがうまくいかなかった実感をもつ事業所が少ないことが浮き彫りとなった。「構造化」とは、「個々子ども

\*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科  
(連絡先) 小田桐早苗 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学  
E-Mail : sawada.s@mw.kawasaki-m.ac.jp

の自閉症特性を理解したうえで、その子どもが理解しやすい環境を設定するための工夫」であり<sup>2)</sup>、個々によって配慮のあり方が異なってくる。しかし、平成21年に実施した調査では、取り組む上で事業所の方針や管理者等上司の考えなどが影響するだけでなく、構造化のアイデアを活かした配慮を個々の自閉症者一律に取り入れてみた結果うまくいかない等、一つのアイデアをそのまま取り入れてしまっている現状があり、それが支援者個人の実践として、うまくいかない実感につながっていることが示唆された。このことから、どのようにTEACCHプログラムが提供する支援のアイデアを学ぶのかという点について検討する必要があると考えられた。

そこで、本研究では自閉症者への支援実践の中で、TEACCHプログラムに基づく構造化のアイデアを取り入れながら継続して支援を行っている支援者を対象に、その支援の継続の要素と学びの機会の在り方について検討するためインタビュー調査を実施した。本研究を通じ、自閉症支援者養成における在り方について示唆できるものと考えられる。

## 2. 研究方法

本研究では、構造化のアイデアを取り入れた支援の継続の要素を検討するため丁寧に聴き取る必要があること、TEACCHプログラムに基づく支援の実践者を対象とした同様の研究がみられないことから、半構造化面接法によるインタビュー調査により詳細を検討することとした。さらに今後、質問紙調査を行うにあたり質問項目等についても検討するため、質的研究により仮説の生成を行う必要があると考え、本調査方法を採用した。

調査期間は2011年8月1日から8月10日であり、各対象者2時間程度の調査時間を要した。

## 3. 調査対象者

B大学で実施されている自閉症支援現任者トレーニングセミナーを受講した支援者を対象者選定の基準とした。これは、対象者の実践がTEACCHプログラムに基づく支援を基盤としたものであることを担保するために、その理念から実践までを短時間で学ぶことができるトレーニングセミナーを受講した支援者を対象とする必要があったためである。さらに、その中からB大学で実施している自閉症支援に関するフォローアップセミナーなどを継続的に受講している支援者に調査対象を絞り、調査協力について依頼した。対象者について上記の条件を設けた理由として、継続的に学ぶ機会がどのように影響しているのかという点を考察することが、本研究の目的

において重要であったためである。上記の条件で該当する支援者30人に調査協力を依頼し、3人（支援者C～E）から調査協力を得られた。

## 4. 倫理的配慮

調査対象者に対し、本研究の目的、方法、調査内容、個人情報管理について、文書及び口頭にて説明を行い、同意が得られた上でインタビュー調査を実施した。倫理的配慮として、匿名性、任意性、調査に協力しないことで不利益を被ることはないこと、同意は撤回可能であること、録音したデータは研究者のみが取り扱うこと、音声データおよび逐語録データは本研究以外には使用しないこと、研究終了後には破棄することなどを説明した。また、本研究は川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した。

## 5. 調査内容

調査内容は、①属性（性別、年齢、職種、自閉症支援現任者トレーニングセミナー受講年、自閉症者支援実践年数）、②構造化のアイデアを取り入れた支援をはじめたきっかけ、③これまでどのような学びをしてきたのか、④構造化のアイデアを取り入れた支援を開始するまでの自身の自閉症者への支援についての認識、⑤現在の自分自身の支援に影響を与えたもの、⑥なぜ構造化のアイデアを取り入れた支援を学び続けるのか、の以上6点である。

## 6. 調査結果

### 6.1 属性

以下に調査対象者の属性について記述する。属性については、性別、調査時年齢、職種、支援実践年数の順に記載する。

支援者C：女性、50歳、小学校教諭、支援年数20年

支援者D：男性、48歳、小学校教諭、支援年数13年

支援者E：女性、28歳、指導員（障害児支援事業所）、支援年数6年

上記調査対象者3名は、調査当時B大学で実施した自閉症支援現任者トレーニングセミナーを受講し2年以上が経過していた。

### 6.2 構造化のアイデアを取り入れた支援をはじめたきっかけ

構造化のアイデアを取り入れた支援を始めたきっかけについて、各対象者に質問したところ以下のような回答が得られた。

（当時、自分の受け持っていた）クラスが混乱していました。自分のそれまでの経験から積み

上げていたものは、自閉症の子には、どんなにやってもうまくいく実感がもてなかったんです。そんなときに、B大学のTEACCHモデル実践報告会で自閉症の子供たちへの実践を知り、見ようみまねでやってみたら、そのときうまくいったんです。（支援者C）

自分がそれまでやってきたやり方では、本人とのやり取りがうまくいかなかったんですよ。このままではまずいと感じていたんです。本も読んだし、模索してましたね。そのときに、当事者の本と出会ったんです。そこで、支援のことが書いてあって…。（支援者D）

前の職場で、既に構造化とかやっていたんです。私はそれを見ようみまねで、引き継いだけだったんです。それで、うまくいかないという実感におち当たったんです。うまく伝わらなくて、子どもが混乱してたし、私も困っていました。そんな中で、コンサルテーションでの指導者のアドバイスが、状況を変えてくれたんです。そこからですね。（支援者E）

支援者Eの発言中にでてくる指導者とは、自閉症支援について専門的に学び、B大学の自閉症支援現任者トレーニングセミナーにおいてもトレーナーとして指導している者のことであった。このように、支援者C、Eは、自閉症者への支援が、自分のそれまでの経験を活かした支援ではうまくいかない実感をもっていたことがきっかけとなっていることが示された。また、支援者Eにおいては、見ようみまねで実践を行っていたが、うまくいかないという実感をもっていたことが、専門家のアドバイスにより深く学ぼうというきっかけとなっていることがうかがえる。このように、それまでの取り組みの難しさが、何か他の方法はないのかという模索につながり、その中でプログラムとの出会いから、学びへの動機につながっていることが示唆された。

### 6.3 これまでどのような学びをしてきたのか

次に、調査時点までに、構造化のアイデアを取り入れた支援についてどのような学びの機会を得てきたのかを、対象者に質問した結果について以下に示す。

対象者3名ともに、本や近隣で開催される講演会からの学びを主としていたと回答した。

支援者Cは、「自閉症支援っていう言葉が入っていたら、とにかく参加しましたね。いろいろ手探りながら、学び続けました。A県はB大学で専門の先

生もいるし、学びやすかったのかもしれないですね。」と述べている。支援者Dは「とにかく本を読みあさりました。当時は、いろんな療法なんかもいっぱい勉強しましたね。でも、TEACCHプログラムの中の構造化がわかりやすかったんです。こんな風にやるんだなっていうか…。」と述べ、支援者Eからは「本を読んだりしてました。職場にもあったし。」と回答が得られた。このように、まずは身近なところから学びをスタートさせていることがうかがえた。

### 6.4 見ようみまねで始めることの壁

6.3で示した話が展開する中で、さらに3人に共通する内容が得られた。共通点として、対象者はそれぞれ本や講演会などに参加し、学びながら各実践現場で自閉症児者へ見ようみまねの支援を実践していたが、あるときうまくいかないという実感を得ていたことが示された。具体的な発言を以下に記載する。

とにかく本や講演会で見たりした構造化を当てはめていました。もちろんそれで解決することもあったんです。でも、それだけではうまくいかなかったんです。書いて示しても全然見てくれなかったり、走り回っていたり…。（支援者C）

手探りながら構造化に取り組みました。一見、うまくいったように思えたんですけど、壁にぶつかったんです。僕は、一方的にこの子に僕の要求を押しつけてるだけで、この子の思いを受け取ってないんじゃないかって思ったんです。（支援者D）

構造化してたらいいんだって思っていたんです。（前の職場の先輩たちがしているのを）ただまねてたんです。自閉症の子には、絵カードって…。そう思っていましたね。でも、やっぱり一人ひとり違うのに、同じ支援でうまくいくわけじゃないですね。自閉症の支援イコール構造化という形だけではうまくいかないという実感におち当たったように思っているんです。（支援者E）

上記の対象者たちの発言より、「構造化」というアイデアが視覚的に示されることが多いことから、見たままを支援に取り入れてみてうまくいかなくならないという共通点がみられた。平成21年度に実施した調査でも同様の内容が指摘されていたが<sup>11)</sup>、異

なる点は対象者がここで取り組みをやめずに、さらなる学びの機会に繋がっている点である。「うまくいなくて、それでトレセミ（自閉症支援現任者トレーニングセミナーのこと）を受けたんです。」（支援者C）、「本当に悩んで、そのときに直接教えてくれるセミナーのこと（自閉症支援現任者トレーニングセミナーのこと）を知ったんです。」（支援者D）、「コンサルテーションの先生が、トレセミのことを教えてくれて、参加してみたんです。」（支援者E）などの回答が得られた。

#### 6.5 構造化のアイデアを取り入れた支援を開始するまでの支援についての認識

次に、構造化のアイデアを取り入れた支援を開始するまでの自身の実践を振り返り、どのように感じるのかについて得られた回答を以下に記載する。

私は、いかに子どもをコントロールするかという視点だったと思うんですね。そう、ほんまに…形や技法を重視していたと思います。今は、子どもとつながる、同じ人間であるという視点で考えているんです。（支援者C）

自閉症かそうでない子の区別がわかっていなかったと思う。しかも、こちら側の考えで関わっていたと思います。本当に…、「違う」ということを教わらなければ気がつかなかった。うまくいなくても、なんでわからないだよって、どうして伝わらないのか不思議だった。（支援者D）

本当に一生懸命でしたが、自分の思いをぶつけていただけだったと思います。表面だけの場当たりの行動をしていたように思います。（支援者E）

このように、以前の自分を振り返る中で、自閉症の理解の乏しさと、個性をどのように捉え支援に活かすのかという視点がなかったことを挙げていることが特徴である。

#### 6.6 現在の実践に影響を与えたもの

次に、現在の自閉症者への支援に影響を与えているものについて質問し、得られた回答を以下に示す。

トレセミを含めて専門家の講演や本ですね。その中で、自閉症をどのように捉えるのかという視点が、とても勉強になりました。どこかで自分とは遠い存在だと思っていたんですが、（専

門家の話を聴いて）ただ得意、不得意な点のはっきりしているだけということを知ったんです。それで、構造化だけやってるんじゃダメだって思ったんです。（支援者C）

トレセミとか専門家の講演ですね。先生方の話を聴いたり、姿勢を知っていく中で、ものの見方…、うん、そう、自閉症の本質をみるようになったんだと思います。価値観が変化したんです。自分が間違ってたんだっていうか…。（支援者D）

コンサルテーションの先生の言葉とかかな…。あと、トレセミで実際にどうやって支援を組み立てるのかを知ったことも大きかったです。子ども一人ひとりをみるという評価の視点を学びました。同じ支援じゃだめなんだっていうか、一人ひとりをみるより、問題行動にばかり目が向いてました。（支援者E）

このように、影響を与えたものとして専門家に直接指導を得られることで、自閉症をどのように捉え、アセスメントを支援に活かすのかという視点を学んだことが挙げられる。

#### 6.7 なぜ学び続けるのか

以下に、対象者が継続的に研修などに参加し学び続ける理由について質問を行った結果を示す。

本人の世界観を思い出すためかな…。うん、現場でずっと支援していると、客観的じゃなくなったり、自分の支援に固執してしまったりする。でも、大切なのは本人だから…。現場に埋没しないためっていうか。それから、同じように学びあう仲間に出会うこと、同じように頑張ってる仲間と久しぶりに出会って、励まされたりとか…。（支援者C）

新しいことを多く知ることが教育者の責任だと思っています。研修会では、専門家の先生がいろいろ教えてくださいますよね。それを知って実践するのが大切だと思っています。…TEACCHプログラムは、柔軟な対応ができる。それが魅力だと思うんです。（支援者D）

自閉症を知るためですね。これまでもそうですけど…、学ぶことで理解が深まるんだと思います。再確認できるっていうか…。（支援者E）



以上から、自閉症についての理解を深め、自分の指針とするものに立ち返るためという理由が挙げられた。

7. 考察

以上の結果を踏まえ、構造化のアイデアを取り入れた支援の継続の要素と学びの機会についての考察を以下に記述する。結果より、対象者3人について図1のような共通の流れが確認された。

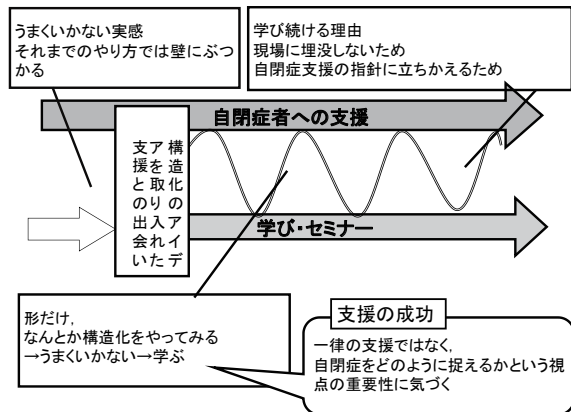


図1 学びのプロセス

構造化のアイデアを取り入れた支援への取り組みや学びのスタートとして、それまで自身が実践してきた取り組みではうまくいかないという実感が存在することが示された。これが発端となり、手探りながらも支援を模索する過程があり、「構造化」を見ようみまねで行うというプロセスが存在した。さらに、見ようみまねの「構造化」ではうまくいかないという壁にぶつかり、より専門的な研修へ参加する機会を通して、自閉症をどのように捉え、支援に活かすかという視点に気づくことが継続した支援に繋がっていた。さらに、対象者3人は、継続して学び続ける理由として、自閉症の支援の指針に立ちかえりたいという思いがあることが分かった。

平成21年に筆者らが実施した調査では<sup>11)</sup>、構造化を形だけ取り入れてみたがうまくいかず、取り組みそのものを断念しているケースが少なくなかった。しかし、対象者3人においては、同様の経験をしながらも、取り組みをやめることはなかった。この要因として、専門家のもとで直接学ぶ機会があったことが挙げられる。書籍という自分なりに解釈して学ぶ方法だけではなく、自閉症支援現任者トレーニングセミナーのように専門家から自閉症者への支援の組み立てについて直接学ぶ機会を得たことで、直面している「支援のうまくいかなさ」に対する方向性が見えたものと考えられる。木村<sup>12)</sup>は、保護

者の家庭での実践に関する調査研究において、同様のことを示唆している。保護者においても、実践当初の段階では、子どもの特性ではなく構造化に焦点をあて、見ようみまねで構造化を取り入れる経験をしており、その失敗に対する支援者の働きかけが理論にとらわれない子どもに合わせた実践の成功につながることを示唆している。以上から、一概に保護者と支援者を同じ視点では捉えられないが、構造化のアイデアを取り入れた支援の取り組みを開始するにあたり、自閉症者の評価に基づく支援ではなく、「構造化」のアイデアにとらわれてしまい一律の支援を行い易い傾向があると考えられた。内山<sup>13)</sup>は、自身の経験から「構造化する意味を知ることの重要性」について、以下のように述べている。

目に見える構造化の手法はわかりやすいので、構造化の奥にある「なぜそのように構造化するのか」という視点を忘れて表面的な模倣になりがちである。「構造化が合わない自閉症がいる」「TEACCHでやったが失敗した」などとされている療育現場をみるとなぜ構造化するのかという視点が忘れられ表面的な構造化の模倣に陥っていることが多い。

本研究の対象者3人は、内山の示す状況に陥っていたといえる。しかし、表面的な模倣ではうまくいかない実感に対して、専門家から学べる機会を得られたことが、取り組みを継続することができた大きな要因であるといえる。専門家がどのように自閉症支援を組み立て実践しているのかという点について、身近で学ぶことができる自閉症支援現任者トレーニングセミナーの受講が、対象者にとって大きな転機となっていた。このセミナーを通じ、対象者は自閉症の捉え方を学んでいる。すなわち、それまでの自閉症支援の価値観を大きく転換する機会となっている。このように実際に直接具体的な指導を得られることが、書籍では学び得ないものを補完しているのではないだろうか。さらに、支援者養成において、「構造化」を伝える際、書籍などで記述されているが、一律の支援ではなく自閉症者個々の評価を基盤とした構造化であることを丁寧に伝えていくことの重要性も示唆された。

また、対象者が学び続けたことの原因については、立ち返る場の保障が重要であると考えられる。対象者の回答の現場に埋没せずに、自分の支援の指針を再確認する意味がこめられている点に注目すべきである。コルブは<sup>14)</sup>、経験の再構成による学びについて指摘している。コルブによると、学びは具体的

経験、反省的観察、抽象的概念化、能動的実験のサイクルの中で成熟するとしている。この視点で本調査を振り返ると、研修を通して自閉症者への支援を具体的に学び体験することで、反省へとつながり、自身の現場への還元へと繋がっていると考えられる。一度、セミナーを受けたから正確に間違わずに支援を展開できるのではなく、日々実践を続ける中で悩んだときに学べる環境に立ち帰ることで、再確認しながら支援を実践することができるものと考えられた。

## 8. まとめ

本研究では、自閉症支援者が構造化のアイデアを取り入れた支援に出会い、個人の中でどのような学びをし、継続した支援につながっているのかという点について示唆することができた。さらに、支援者

養成を行う上で重視すべき点を示すことができたものとする。支援においては、実践技術のみに視点を向けるのではなく、その支援の指針に立ち返りながら支援を展開することが重要である。本調査対象者らも、学びのサイクルの中で、立ち返ることの重要性に気付いていたといえる。しかし、本調査では対象者が少ないため、今後はより多くの支援者を対象とした調査を展開し、幅広く支援者養成の在り方について検討を行いたい。

## 9. 謝辞

本研究は、川崎医療福祉研究の助成を受け実施したものであり、研究助成選考委員の方々に篤く御礼申し上げます。さらに、本研究の趣旨をご理解くださり、快く協力いただきました3人の研究協力者の方々に深謝いたします。

## 文 献

- 1) 佐々木正美：自閉症児のためのTEACCHハンドブック改訂新版自閉症ハンドブック。学習研究社、東京、36、37、2008。
- 2) E. ショプラー編著：自閉症への親の支援TEACCH入門。初版、黎明書房、愛知、2003。
- 3) 佐々木正美監修：TEACCHプログラムによる日本の自閉症療育。初版、学習研究社、東京、2008。
- 4) 内山登起夫：本当のTEACCH自分がじぶんであるために。初版、学習研究社、東京、19、2006。
- 5) 佐々木正美監修：TEACCHビジュアル図鑑自閉症児のための絵で見る構造化。初版、学習研究社、東京、2004。
- 6) Yamada S : Effectiveness of the physical structure for an individual with autism. *Kawasaki journal of medical welfare*, 14(1), 23-27, 2008.
- 7) 寺尾孝士：行動障害を示す自閉症の人たちへの支援構造化のアイデアを応用して。川崎医療福祉学会誌, 21(1), 172-173, 2011。
- 8) 山口大学教育学部附属特別支援学校：個別的教育支援計画に基づく授業づくりー知的障害のある自閉症男子生徒の自立活動の指導を例に。学部・附属教育実践研究紀要, 10, 47-60, 2011。
- 9) 森本久美子：軽度知的障害者に対する相談支援における支援困難事例の特性分析。社会福祉学, 52(2), 80-93, 2011。
- 10) 永見史織：自閉症児者支援に対する視点変化のプロセスーTEACCHトレーニングセミナーの語りからー。川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科医療福祉学専攻修士（医療福祉学）論文集, 2010。
- 11) 大田晋, 下田茜, 澤田早苗：自閉症等発達障害児・者を支援する施設・事業所におけるTEACCHプログラム導入方策の調査・研究ー施設・事業所、教育・研究機関、行政等の連携の在り方を含めてー。平成21年度 厚生労働省 障害者保健福祉推進事業助成研究報告書, 2010。
- 12) 木村友香理, 小林信篤, 佐々木正美：家庭で構造化された指導法を実施する実態およびその実践に影響を与える要因ー自閉症スペクトラム児の親への質問紙調査およびインタビュー調査からー。川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科医療福祉学専攻修士（医療福祉学）論文集, 2010。
- 13) 内山登起夫：第1章TEACCHの考え方。佐々木正美編, 自閉症のTEACCH実践, 初版, 岩崎学術出版, 東京, 26, 2002。
- 14) 赤尾勝己：生涯学習理論を学ぶ人のために。初版, 世界思想社, 京都, 2004。

(平成24年11月14日受理)

## Supporter Recognition or Practice and Learning about People with Autism –an Interview Survey of Supporters of Autism–

Sanae ODAGIRI and Shin OTA

(Accepted Nov. 14, 2012)

Key words : autism, supporter recognition, supporter practice, learning, TEACCH

### Abstract

This study's purpose was to identify factors that supporters use in helping those with autism. What were the factors that enabled them to continue adopting structured teaching in their place of work? Three supporters were interviewed.

The process of maintaining a structured teaching environment in their place of work and the factors which influenced it were discussed.

These factors included the supporters' experience, the effectiveness in structured teaching and the supporters' consciousness and motivation and understanding of structured teaching. Moreover, it can be suggested that skilled professionals and specialized agencies are in need of such support staff.

Correspondence to : Sanae ODAGIRI

Department of Social Work  
Faculty of Health and Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-0193, Japan  
E-Mail : [sanae.s@mw.kawasaki-m.ac.jp](mailto:sanae.s@mw.kawasaki-m.ac.jp)  
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.22, No.2, 2013 158 – 164)